



扇形分析をめぐる諸問題

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 北海道教育大学 公開日: 2012-11-07 キーワード: 作成者: 金谷, 茂 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00002757

扇形分析をめぐる諸問題

金 谷 茂

0) Robert L. Allen の提唱する扇形分析 (Sector Analysis) について、その分析の基本的仮説、言語学的特徴を含め、概略を拙論¹⁾で既に述べてきた。最近 “Word” 誌上に発表された “Prolegomena to a Neo-Structuralist Theory of Language”²⁾の中で、Allen は彼独特の言語観の展開を試みているが、そこには老練な英語学者の躍動が感ぜられる。しかも扇形分析について、“To my best of my knowledge, the only type of linguistic analysis which does truly insist upon the search for the constructions of maximum relevance is sector analysis.”³⁾と述べているように、今尚その分析に強い確信をいっていることがうかがわれる。しかし、自信にみちた論法の陰に、その分析手法が大方の支持を受けているとは必ずしも言えない現状に対する苛立ちをみることができる。

この小論では、扇形分析をめぐる諸問題について、今までの拙論で充分述べることができなかった点を中心に、私見の幾つかをまとめてみたいと思う。

1) ある言語の構造について考察する場合、これを構成素に還元し、全体としての総合的な言語の機能を分析的に解明しようとする試みがある一方、又逆に全体としての総合から下って、全体としてのそれぞれの要素の機能を見ようとするものもある。又、地表における分布から見ようとする立場もあれば、もっぱら内的機能の究明に力点をおくものもある。これを上昇、下降という方向性で概括するならば、Allen の手法は、後者即ち下降という過程の中で構造が扇形となって表われることを第一に確認しておく必要がある。このように始発点を「単語」に求めずに文に求めようとする最大の理由は、文が並列された単語の総和以上のものであり、まずその情報を総体的に把握しなければならないという前提があるからである。確かに単語という単位概念が与えられて、はじめて文は1語文あるいは多語文として固定することができるが、話者および聴者にとって、文は本来単一の文という単位であって、意識的な分割は特別な目的意識をもった時のみ有意味であるといえることができる。更には又、最小の統語単位をそれぞれ分節してから大きな構造へ進む方式においては、文法単位の形式を強調しがちであり、文中のすべての単位を同一レベルにあるように取り扱うので、単位とその環境との関係や、階層的構造を解き明かすには至らない。文を始発記号として、分析以前に統一体としての言語的事実を把握しようとする試みは、“phonemic analysis must come first”⁴⁾というアメリカ構造主義の命題とはまさに逆の、扇形分析における大きな特徴の一つと言える。それは、“Reductive analysis has arrived from the start : it looks at familiar country—total meaning utterances—and reduces it to a linguistic map.”⁵⁾という Haas の論評に象徴されるように、全体の意味構造を重視することに他ならない。

従って、文の分析にあたっては、より大きな構造の中における機能位置が調べられたのちに、それより低い位置での充当群が確認されるが、その過程が既に述べたように扇形となって表われる。

即ち、一連の分析において、機能と形態という順序がくりかえされるわけで、その分析の過程は試行錯誤のそれである。この背景には、もし下降分析 (reductive analysis) が上昇分析 (expansive analysis) よりも一層生産的であり、又文の諸位置が充当されれば基本的位置の固定化された連続体として文が定義されるものとするならば、その基本的位置を決定するために文を検討することが必要になるという基本的仮説があることを銘記しなければならない。

言語分析において、その単位や関係のパタンに主眼点をおく時、一般にその記述は形態的であるとともに、当然構造的になるが、特にその単位の機能は Allen においては、“function of any unit—be it a word or a construction—is determined primarily by the position that the unit fills within another, larger construction, on a higher layer of structure”⁶⁾ と述べられているように、構造形的位置によって決定されるものである。即ち単位の分布は、それがどういう前後関係の中にあられるか、又同じ前後関係の中で他のいかなる単位と交替できるかという統合的及び選択的關係の中で規定されるのである。それは、まさしく Longacre が示した“intimate—correlativity of function and set and the mutual dependence of each other”⁷⁾ を明示することに他ならず、更には又、従来の英語に関する記述分析の問題点はより大きなパタンを確認できず、品詞という範疇に構文を無理におしこめようとした点を強く指摘している Nida の“……to study the larger patterns and classification of structure and function as they fit into the patterns”⁸⁾ を目ざす分析手法と、ある意味ではいわば相似的關係にあるといえよう。

2) Allen の目ざす“approach that emphasizes positions, especially positions at the sentence level”⁹⁾ は、同時に“I cannot agree with Block and Trager that a language is made up of only vocal symbols.”¹⁰⁾ という Allen の論評にみられるように、speech と writing をそれぞれ primary, secondary とはせずと同等のもの、あるいはそれぞれの“conventions”をもった相補的なものとみなす立場であって、その分析の結果そのものは総じてむしろ writing へ傾斜していると言ってよい。それは、Allen が“This writer does not believe that written English is merely a pale reflections and should be studied in its own right”¹¹⁾ と述べていることから明白であり、“speech is primary”とする構造文法とは一線を画していると言える。少なくとも「書く者」, 「読む者」の立場をその指向として考慮していることは明らかである。Allen によれば、およそ“good writer”は構造形のある中からある限定された数のものを使用しているのであって、書き手によって扇形核の表れ方に差異がある。F扇形核に clausid を殆んど使わずに、それをO扇形核で使うということもあろうし、又S扇形核において cluster あるいは pro-nominal 以外のものは表現しないということも起り得るわけである。このような構造形の使い方を検証することによって、扇形分析は文体の考察に有力な手がかりを与えるという Allen の主張は、仮説として充分理解できるものである。

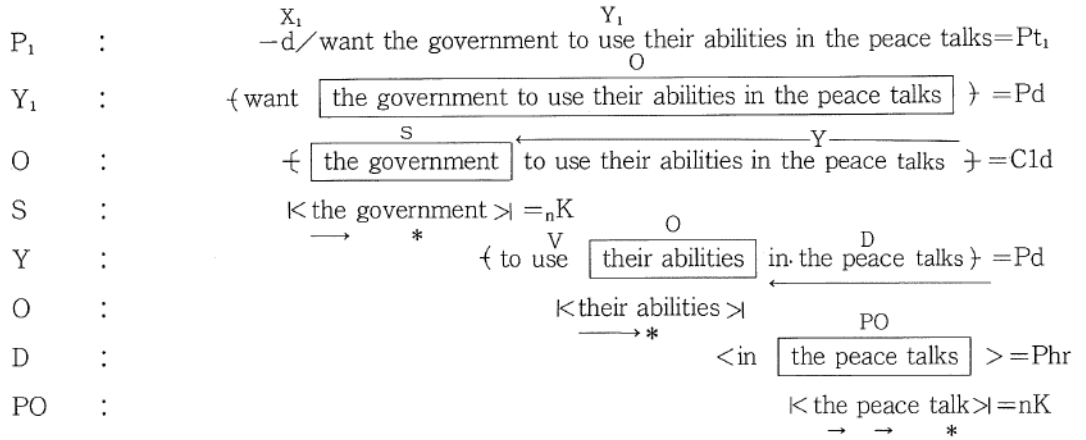
そこで、英語における扇形核 (sector) を示すために、最も典型的な分析を試み、それについて若干の考察を加えたい。まず一つの例文として、“But because by the end of the war they had already had studied Japanese for about a year, these very diligent Americans enrolled in the universities in the northern states wanted the government to use their abilities in the peace talks.”の分析は次のようになる。

A : 文レベル

SENT_n ^{cap} But because by the end of the war they in the peace talks. = S_n ^{punc}
^L U₁[†] : But because by the end of the war they in the peace talks = Ut[†]
 U₁ : because by the end of the war they in the peace talks (E₁ = Ut₁)
^I F₁ : [because | by the end of the war they for about a year] = C₁
^{F₂} U₂ : by the end of the war they for about a year (E₂ = Ut₂)
^P F₂ : < by the end of the war > = Phr
 PO : < the end of the war > = nK
 → * ←

T₂ : they had already had studied Japanese for about a year = TK₂
^{S₂} ^{P₂[†]} P₂[†] : had ^M already had studied Japanese for about a year = Pt₂[†]
^{X₂} P₂ : had / had studied Japanese for about a year = Pt₂
^{Y₂} Y₂ : ≠ had studied Japanese for about a year = ct
^V H : { had studied Japanese } = Pd
^{aux} V : had studied = VI
^P D : < for about a year > = Phr
 PO : about a year = KK
 * : < a year > = nK
 → *

T₁ : those very diligent Americans enrolled in the universities in the northern states
 ← wanted the government to use their abilities in the peace talks. = TK₁
^{S₁} S₁ : < those very diligent Americans enrolled in the universities in the northern states > = nK
 → : < very diligent >
^H ← : ≠ enrolled in the universities in the northern states = C₁
^V H : { enrolled } = Pd
^{PO₁} D : < in the universities in the northern states > = Phr₁
 PO₁ : < the universities in the northern states > = nK₁
^{P₂} ← : < in the northern states > = Phr₁
 PO₂ : < the northern states > = nK₂
 → *



B : 語レベル

But	:	because	:	by	:	the	:	end	:	of	:	the	:	war	:	they	:	had	:	already	:	studied	:	Japanese
linker	:	includer	:	prep	:	det	:	n	:	prep	:	det	:	n	:	preN	:	X-wd	:	mid-adv	:	V	:	n
for	:	about	:	a	:	year	:	those	:	very	:	diligent	:	Americans	:	enrolled	:	in	:		:		:	
prep	:	constr-mod	:	det	:	n	:	det	:	modi-mod	:	adj	:	n	:	v	:	prep	:		:		:	
the	:	universities	:	in	:	the	:	northern	:	states	:	wanted	:	the	:	government	:	to	:	use	:	their	:	
det	:	n	:	prep	:	det	:	adj	:	n	:	v	:	det	:	n	:	inf	:	v	:	det	:	
abilities	:	in	:	the	:	peace	:	talks	:		:		:		:		:		:		:			
n	:	prep	:	det	:	n	:	n	:		:		:		:		:		:		:			

(prep……preposition, det……determiner, n……noun, pro-N……pro-noun
 X-wd……X-word, mid-adv……middle adverb, V……verb, adj……adjective
 constr-mod……construction modifier, modi-mod……modi-modifier, inf……infinitive)

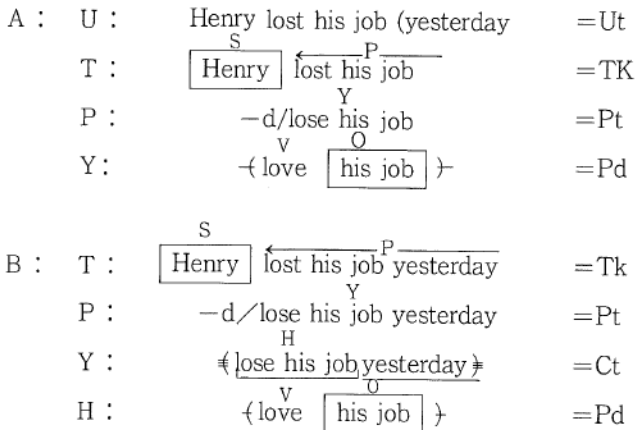
以上に示された分析例において、SENTn (sentence n)¹²⁾ = cap(capitalization) + U⁺(sentence unit)¹³⁾ + puc(end punctuation)で始まる文の構造は、U₁ (単位文) が、F₁ (Front)、T₁ (Trunk) 及び E₁ (End)¹⁴⁾ から構成されている Ut(compound sentence-unit)であることがまず明示されている。更に、F₁は I (includer)と U₂からなる Cl(clausid)であり、F₂は P(preposition)と PO(object of the preposition)からなる Phr(phrase)であり、POは構造上 nk(noun cluster)であることが表わされている。次の段階では、T₂の構造形が分解され、更に P(predicate)へと進むわけである。

3) この展開における最も主要な目標は、階層 (layer) の抽出に他ならない。それは、Allenが “……the layers in an onion, which can be ‘pealed off’ one at a time, working from the outside layer inwards”¹⁵⁾と述べているように外側から内部へと順次ときほぐすことのできるものである。確かに、“We can believe just just judges.” (正しい裁判官のみ信頼できる)において、 \vec{j} ust \vec{j} ust

judges > は二つの just の階層関係が違つたために上記のような意味が合図されることは明白である。^{*} この階層抽出手法によれば、“The hat on the table in the hall belongs to him.”における S 構造即ち名詞構造形である“the hat on the table in the hall”は語レベルに至るまで 6 層構造として表わされることになる。

“Happily he did not die.”と“He did not die happily.”の意味構造の間における機能の分担の相違についての説明力は、このような扇形として展開される階層の下降分析の有力な支持理由になるものとする。

これと密接に関連しているものに重層化 (nesting) という構造形の考え方がある。それによれば、文とは連続的なより高い階層構造上の固定的位置におこる、上位構造内部に重層化された語あるいは構造から成り立つ (a sentence may be said to consist of a hierarchy of words or constructions nested within larger constructions occurring in fixed sequences of position on successively higher layer of structure)¹⁶⁾ のであつて、単に数珠状ではない文法関係があるとする考え方である。これに従えば、“The baby is asleep in its crib.”は、① The baby is asleep. ② The baby is in its crib. の 2 文が 1 文に重層化されたものと説明でき、又① Kelly found his boss asleep. ② Kelly found his boss in his bed. の 2 文は、“Kelly found his boss asleep in his bed.”という 1 文に重層化されたものと解釈できることになる。このことは、当然扇形核の確認にあたって 1 個の文に複数の分析が可能なることを示すものである。例えば、“Henry lost his job yesterday”は、“Henry is upset. He lost his job yesterday.”の場合と、“Henry didn’t lose his job last week. He lost his job yesterday.”の場合とで、A、B 二つの分析が可能である。

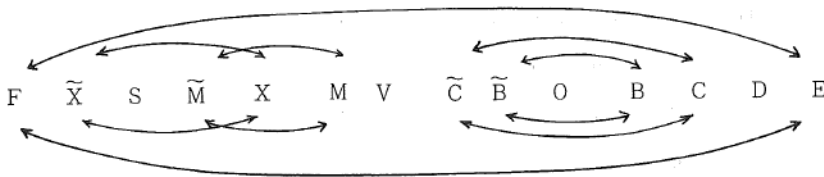


従つて、扇形分析は、一定の文において充当詞の果す機能は、その文中の次に高いレベルでの構成形におけるそれら充当詞が占める位置によって第一義的に規定されると仮定しているのであり、その文において扇形核として定義できる機能的位置の階層体系を決めることが重要な目的となる。

4) 語と語との間における文法的関係を重視する扇形分析においては、必然的にその関係を示す決定的役割として語順型に大きな関心が寄せられている。言うまでもなく、英語において屈折語尾を失つた代償として確立された語順は、結果的にいわゆる機能語の活動範囲を著しく拡張するに至つたが、それとともに多様になつた表現構造が、英語の構造形を非常に複雑にしていることも疑いない。それ故、文という概念そのものが簡単に規定し難いが、扇形分析のように、SENT :+cap+

U+punc=Snによって確認される方式は、形式上比較的容易に抽出できる単位である。しかも、文を構成する要素のグループを、主部、述部にわけ、更にそのグループを主語 (S)、動詞 (V)、目的語 (O) という配列順序を示す以前に、U:±L±F)+T (±E=Utによって語順の見通しを展望することは、他の自然語についても妥当な普遍性のあるものかどうかを別にすれば、非常にわかりやすく、特に英語構造の特性を知る上に便利である。問題は、現実の発話において、各要素の順位変更、省略などが数多く生ずることである。換言すれば、文法的規制の強い標準的語順と伝達を主眼とする機能的語順とは必ずしも一致しないのであって、扇形核の確認が「文法的完全性」とどこまで係りあうかが焦点となる。例えば主語を「X-wordがYes-No Questionにおいてそれらを中心に転位する語又は語群」(the subject of a sentence is defined as the unit around which an X-word shifts in Yes-No question)¹⁷⁾と定義しているけれども、この定義では文体上の倒置にみられる語順変更に対応することはできない。勿論、Allenはこのことを前提に“*It cannot be claimed, however, that the units in all English sentences are so ordered: English allows for certain variations and alteration of the basic order.*”¹⁸⁾と述べているのであるが、“there is”構文にその例をみる如く、無理な分析結果がでることになる。結局、basic order という語順型に限定し、かつ writing に傾斜した分析法になったのは、処理しきれない複雑化した構造形を除かざるを得なかったためと思われる。

この基本語順型の交替 (alteration of the basic order) に関連して転位性 (shiftness) という概念が扇形分析では重視されている。それは、前述した主語の定義でも中心概念となっているが、この転位性を最も中心的な扇形核について図式化すれば次のようになる¹⁹⁾。



これによって明らかにされているのは、F, E, X, M, C, Bについてそれぞれ交替が可能であるということである。例えば、

- ① The wind ^S has ^V blown ^{C̃} the door ^O open ^C
- ② The wind has blown open the door .

において、C̃の位置に②のように openが転位されることがしばしばある。又

- ③ Percy ^S threw ^V into the fire ^{C̃} the letter which she had written him before ^O .

において、C̃はOの後方に位置すべき扇形核であるが、Oの配列型が長いためOの前方に転位したものと説明可能である。Cは、……a position for predicators — that is for units that make (non-finite) predications about preceding nominals²⁰⁾との定義からすれば、学校文法における目的格補語と同類と考えられるが、実際は“Kelly found his boss asleep in bed.”にみられるように、C₁は先行名詞(群)即ちO扇形核に最も密接な修飾関係を維持し、C₂は前置詞句(節)の位置として前者とは区別されているので、在来の分類によるCとはかなり異なった構造形を含むものである。そこで、

C扇形核の転位で最も典型的なものは、次の例にみられるものである。

- ① He ^V gave ^{C̃} an apple ^O to his teacher. ^C
- ② He gave his teacher an apple .

この処理において問題になるのは、前述の①、②及び③の場合と違って、転位されたCの構造形が変わってしまうという点にあり、本来的位置へのCの転位というAllenの説明には十分な説得力があるとは思われない。

Bについては、“……regularly filled by a single word — a particle”²¹⁾ という説明が与えられており、以下の例にみられるものである。

- ④ The stranger turned ^S ^V ^{B̃} the light ^O on. ^B
- ⑤ The stranger turned on the light .

即ち、不変化詞がOを中心に転位するものである。上記の例の不変化詞 on は“up the ladder”, “on the table”などの前置詞とは異って、その後方に名詞構造形をもたないものであり、“come on to me”にみられるものである。問題は、例④、⑤に示されているように、Oの後方を本来のB位置とし、Oの前方を転位位置としていることである。これはOが代名詞の他は、比較的短かい構造形の場合を除き、むしろ“turn on the light of the gate”にみられる如く、前方位置の方が本来的位置と考える方が妥当であろう。

5) 実際の表現行動としては表われないが、構造上潜在的位置を確認しておく方法として、扇形分析では空表示 (vacant) ということが基本的な考え方の中にある。これは次のような分析例にみられるものである。

T	:	$\overbrace{\text{the green trees which stand behind our house}}^S \leftarrow \text{are} \overbrace{\text{fir}}^P = \text{TK}$	
S	:	$\left\langle \overrightarrow{\text{the green trees}} \leftarrow \overrightarrow{\text{which stand behind our house}} \right\rangle = {}_n\text{K}$	
←	:	$\left[\overbrace{\text{which}}^I \mid \overbrace{\Delta \text{ stand behind our house}}^U \right] = \text{Cl}$	
U	:	$\overbrace{\phi}^F \Delta \overbrace{\text{stand behind our house}}^T \left(\overbrace{\phi}^E \right) = \text{Ut}$	
T	:	$\overbrace{\left[\Delta \right]}^S \leftarrow \overbrace{\text{stand behind our house}}^P = \text{TK}$	

この例においては、Uレベルで△によって表示された位置は、Tレベルで主語位置であることが確認されている。これは、Allenが“An examination of a larger of sequences suggests that in most non-literary sentences there is a kind of ‘spectrum’ of basic positions, which may be ‘sector’”²²⁾ と述べている“spectrum”に他ならず、いわば残像として表示されているものである。このような解釈からすれば、“Vegetables are good for you.”のような例文において、S扇形核は名詞“vegetables”によって充当されていると考えるのではなく、名詞句構造によって潜在的に充当されていると分析されることになる。即ち、随意的修飾語に対する機能孔が空であって、結果として中心核の“vegetables”のみが現実の発話段階で表現されたということになってしまう。このような考え方は、Hallidayの充当されない機能孔の、“……an elliptical item is one which, as it were, leaves specific

structural slots to be filled from elsewhere”²³⁾とする立場と類似点があるけれども、Allen では Halliday よりも相当拡大された解釈をしており、扇形分析の主要な前提、即ち文とは固定された基本的位置の連なりであり、同じ順序性をもって起り得る位置が扇形核であるとする考え方にいわば規制するものがなくなってしまう結果となる。結局、構造形の種類は解明されても、文型としての構造パターンが明確に浮かびでてこないという問題が残る。

潜在性に関して、Pd(predicativid)を次に考えてみたい。扇形分析において、-id 形をもつものは、clausid と predicativid があり、それぞれ Cl (clause) と Pr (predicate) としての潜在的構造形をもつものである。元来 Pr は

- ① He is pleasant. (Pr=adj)
- ② He is a good teacher. (Pr=nk)
- ③ He is in his classroom.(Pr=prep. phr)
- ④ His hope is that all his students will pass. (Pr=clause)
- ⑤ He is correcting his students' papers. (Pr=predicativid)

の例にみるように多様な構造形をもつものであるが、⑤に示された例からもわかるように、“constructions introduced by non-finite verb form”²⁴⁾と定義される非時制指示形が中心である。Pd を構成する4個の扇形核のうち、Vのみが義務的であり、あとのO, B, Cは任意的であるから、(+V ± O ± B ± C) = Pd の配列型となる。これは、英語において最も多目的な構造であり、次例のように広くみられ出るものである。

- | | | |
|---|---|--------------|
| ⑥ | You must write your name with a capital letter. | Base Form Pd |
| ⑦ | I am writing my name with a capital letter. | Ing Pd |
| ⑧ | His name is written with a capital letter. | N Pd |
| ⑨ | His intention is to write his name with a capital letter. | To Pd |

上例でみるように、Pd は X-word を除いたもので、この区分は IC 分析と基本的に異なる点の一つである。この区分には、動詞の形態は時制指示か非時制指示かによって、verbex および verbid に分けられるという考え方がある。verbex には ϕ Form, S Form, Past Form があり、verbid には、Base Form, Ing Form, N Form があるのであるが、predicativid は verbid の3構造に To Form を加えたものである。そこで、このような X-word を分離した区分は、構造形の抽出方法として充分なる説得力をもつか否かが問題である。このことを考察する前に、Allen が強調している結合(tie)あるいは結合価(valence)と呼ばれる構造的な特性を考えてみる必要がある。一般に、ある語、あるいは構造と、他の語及び構造との間には、それが一定の有意な配列である限り、何等かの結合関係が存在することは否定できない事実である。それは、“A bird flies.”、“Birds fly.”における“bird”と“fly”の関係のように顕在的な場合もあろうし、“The man came.”、“The men came.”のように潜在的なものもある。Allen も Halliday と同様、従来の IC 分析における二分法に固執すると、構造にとって重要な意味のある切れ目とそうでないものとの区別が失われる恐れがあると考えているのである。このような結合にみられる段階性からすれば、“How are you?”や“I like my coffee good and hot.”における“good and hot”(=very)などは、最も結合度の高いものになる。又、次の分析過程、即ち、

T :	$\begin{array}{c} \text{S} \\ \boxed{\text{those three very green trees}} \\ \text{are firs} \end{array}$		← P =TK
S :	$\langle \text{those} \ \underline{\text{three}} \ \underline{\text{very green}} \ \text{trees} \rangle$		= nK
	$\begin{array}{c} \langle \text{very green} \rangle \\ \longrightarrow * \end{array}$		= jK

において、Sが名詞句構造 (nk) として示されているが、その内部構造の分解は“very green”を adjective cluster (jk) として一機能とみるのも、結局結合度からすれば二分することは無意味であるとする立場をとっているからである。これらの構造的特徴は、関係 (relation) という考え方も異なることは、“they (relationships) are best described as the relation of something to something else, not as the relation holding between two or more elements.”²⁵⁾と述べられていることから明らかである。即ち、結合は位置あるいは配列上の問題と密接に係っているものである。IC分析が最小単位に還元されるまで構造の位置の一つ一つに対して2項切断を続け、切れ目の順序は實際上単位として機能を果たさないものが表われてくる可能性を含み、総じて非体系的であるという欠陥を呈したが、これに対し結合度を重視する扇形分析は、当然ICとは異なる結果を生み出すことになる。IC分析における“I | will be ready.”は既に述べたように、扇形分析においては“I will | be ready.”のように verbid を得ることになるが、この根拠として主語核が will と融合する度合いが強く、実際の発話でしばしば“I'll”となることが一つの理由になっている。確かに、shall、及びbe動詞の場合はそうであるが、他のX-word即ちmay, must, need, dare等の若干の用例をみれば、主語核との融合が一般的特性とは必ずしも言えないことは明白である。結合度から言えば、X-wordは助動詞 (helping verb) として、即ち動詞に重要な意味を付与するものとして動詞の方に近いとみなすべきであろう。従って、X-wordの分離はむしろ、強力な表現力をもったその独自性にあると考えた方が説得力をもつように思われる。いずれにしても、X-wordから引き離された predicatid は、時制指示については無色透明なる構造形であるので、ある意味ではきわめて融通性のある扇形核であり、S、O、Cいずれの位置をも充当できる潜在性をもつものと言える。

6) ここで扇形分析における品詞について考えてみたい。伝統文法における品詞分類が、“very notional definition”²⁶⁾という批判をあげてきたのは、まさしく意味規準への傾斜があったからに他ならない。構造形を重視する扇形分析においては、核を中心に配列が重視されているので、語類の判断は分析が最終段階に至って全てにわたってなされることになる。この場合、名詞、代名詞、形容詞、動詞など、内容語を中心とする基本語類の分類は、用語から予想されるように在来の品詞分類と類似性が高いとみてよい。他方、X-wordと助動詞の区別を初め、結合詞 (linker)、包含詞 (includer)、構成形修飾語 (construction modifier)、複修飾語 (modi-modifier) などが特徴的な語類である。X-wordは伝統文法の範疇では助動詞に分類されているが、扇形分析においては“^{He}_{pro-N} had already been expecting the news”のように区別している。これは、現代英語において確認されている23個のX-wordが機能上最も重要な特性を有すると考えられているためである。結合詞、包含詞は、徒来接続詞として分類されていたものであるが、これを階層関係のない等質な構造形を結合するものを結合詞、階層関係があり、依存構造をなしているものを包含詞としたものである。構造修飾語は、“He has been waiting for almost an hour.”、“Happily he did not die.”における“almost”“happily”の例で、それぞれ“an hour.”、“he did not die”という構造形を修飾しているものである。複修飾語は、修飾語を更に修飾する二重構造修飾語で、“He runs very fast.”“It's pretty

good.”における“very”, “pretty”がこの語類の例である。これは従来、形容詞、副詞を修飾するものは副詞という包括的な分類を、それぞれ別個のものとして分けたものである。中間副詞はその構成の文法性および総体的意味内容を変えずに述部レベルのM位置からD位置、又TとX-wordの中間位置へ転位できる単一語である。その語順型は、S-X-M-V-C-E (He has already written the paper in the morning.) 及びS-M-X-V-C-D (He always will take a walk in the morning.) であり、副詞の中でも最も中心的な機能を有する語群である。この中間副詞は、扇形核の描出の過程において、従来の単一語即ち“already”, “also”, “always”, “ever”, “just”, “never”, “not”, “often”, “perhaps”, “seldom”, “sometimes”, “soon”, “still”等の他、その位置に各種の副詞構造が充当され、しかもその構造形が長くなりつつあることが明らかにされており、現代英語の特徴の一つとして注目に値する。

これら結合詞、包含詞を初めとする品詞分類は、異なる種類の構造形を描出するためにより適切に対応できるという意味では、在来の分類よりもすぐれている。ただ、全ての構成形は、又更に別の構成形を擁する異なる一連の位置から成るとする扇形分析の立場からすれば、特に前置詞、限定詞の下位分類が必要であり、品詞分類の不統一の批判はまぬがれ得ないと考える。

7) 次に扇形核と日本語との関係について考えてみたい。比較的多くみられる日英両語対照比較のなかで、Allenの分析をモデルとしたものは、Jacksonの英語中間副詞と日本語相当詞の対照研究²⁷⁾のみである。この研究において、一般に頻度の副詞 (adverb of frequency) と呼ばれる中間副詞について、その語義的内容を担う日本語の項目を見つけ、それに関する語順型の対照分析が試みられている。Jacksonの分析は、扇形核の分析が日本語と英語で全く別々に行われているために、対比分析が簡単にできないという問題点はあるが、日英両語に確かに存在し、かつ正確には対応しない形式類の類似性を認めることは可能である。元来、日本語と英語のようにかなり異なった文体系をもっている二つの非同族言語の構造を、逐一对照することが果して可能であるかどうかという根本問題があるが、Jacksonは、「構造を伴う体系」としての言語は、機構の原理及びその下位体系に、普遍的な構造形を内包しているであろうという仮説を前提としている。即ち、それぞれ異なるレベルをもって機能しているが、そのレベルにおける構造は記述できるという確信がその背景にあるわけである。Jacksonは、まず扇形分析が、英語を習得するにあたって日本人学習者が当然直面するような問題の解明に有用かつ妥当なものであることを示そうとしている。彼によれば、日本語の扇形核は、R (接続部)、T (付加部)、Z (属部)、S (主語部)、F (副詞部)、H (補部)、C (陳述部)、D (動詞部)、X (助動詞部) である。その階層は、最も高いレベルの「(R)文-T」構造から最低レベルの「D-X」レベルに至るまで、相互依存関係があることを示している。その語順は、Z-S-F-H-C-D-X-Tという配列型であるとしているが、問題はそれ以外の型があることである。例えば、「今日まで/太郎は/一度も/学校で/思う存分/野球を/したことがない」のように、S-C-FあるいはF-Fなどの語順型も可能なのであって、Jacksonが示している転位可能な扇形核、即ち (R) (Z)-S(F)-H(C)DX T²⁸⁾ では、このような語順型に対応できないことは明白である。又日米両語間の扇形核の対応の欠如を示すために、それぞれ異なった用語を用いているが、それが逆に「共通の要素」という対照比較の基本認識を困難にしておき、外国語習得に際してこれら要素が持ちこむ干渉度を解明しようとする当初の試みが著しくそこなわれていることを認めざるを得ない。

8) Allen は、外国語教育に長くかかわってきたこともあって、その言語観は分析の応用性を常に念頭においていると言っても過言ではない。ただし、それが果して外国語としての言語学習に直接応用可能かどうかは充分検討されなければならない。Allen は、“……the grammar must build upon what students already know and feel, consciously or unconsciously, about the structure of English.”²⁹⁾と述べ、このような文法は言語の源泉たるべき諸相を帰納的に認識し身につけさせるに至らしめるとしているが、ここで言う“student”とは、結局母国語話者としての立場を前提としていられるのであって、総じて writing form へ傾斜しているのもそのためであろう。このことは、Allen の英語研究の系譜を辿ってみると一層明白である。彼がコロンビア大学において Fries 教授と親密な関係にあった Kitchen 教授に師事したことは、当初大きな影響を Allen に与えたことは疑いないが、同時に学際的な分野として心理言語学に興味関心をもつに至ったことが、その後の Allen の理論形成に大いに関与したと思われる。その第一は、場面あるいは状況を含む文脈(context)にみられるもので、少なくとも彼の心理言語学的傾斜を暗示するものであり、その延長線上において理解できるものである。“……context greater than that of sentence alone may very well determine the grammaticality or acceptability for a given form.”³⁰⁾とする Allen の立場は、究極のところ、“the context is just as important to the understanding of a unit as is the unit itself”³¹⁾という構造単位重視に結びつく。即ち個々の単位は、文脈というマクロ単位によってまず状況設定されることになる。Allen が意味 (meaning) と表示 (signification) とを使いわけているのも、言語形式の潜在的意味の総体的範囲 (total range of potential ‘senses’ of a linguistic form) と、ある特定の状況においてその形式が表わす意味要素の特別な組合せ (specific combination of semantic components denoted or connoted by the form in a specific situation) とは区別されなければならないと考えているためである³²⁾。前者を意味、後者を表示と呼んでるのであるが、それは結局“a given form has signification only when it is used in a meaningful or ‘significant’ situation”³³⁾という Allen の言葉に要約される立場である。この意味と表示に介在するものが注意の焦点化 (focus of attention) という一種の認識活動であって、その焦点化と文脈の関係の顕在化が有意味な言語行動となるわけである。この考え方に従えば、焦点化対文脈関係を表わす最も典型的単位は、主語対述語構造を有する文になる。このような論議の展開には、Allen 自身が認めるように J. Piaget の構造 (structure) に関する仮説の影響が少なくないと思われる。

このような文脈についての考え方は、文を越えた構造の仮説にもみられる。Allen によれば文内部には勿論各種の階層があるが、更に文を越えた構造にも階層を認めざるを得ないというのである。それが最も明確に表われるのは、文体機構 (Stylistic device) と呼ばれるものである。例えば一連の文があって、その主語がそれに先立つ修飾構造を全くとらずに、名詞あるいは代名詞による単一の語からなるものもあれば、逆に主語に先立つ構造句があって、前文との対照によって文脈中できわ立つ文もある。即ち、文と文の連なりによって生ずる力関係が文体機構を生み出すというものである。中でも“larger syntactic units that combine in different ways to make up the infinite numbers of sentence (and even units larger than sentences) that speakers and writers have uttered or written in the past, or will utter or write in the future”³⁴⁾との考え方は、文を越えたマクロ構造に関する扇形分析の仮説を知る貴重な手がかりである。しかし実際の分析例をみると、包含詞、連結詞等にそれに対応した分類がみられるが、文レベル以上の総体像を我々は現在のところ知り得ない。

次に、選択あるいは濾過機構 (filtering or selectional device) という考え方にも、Allen の心理言語学的傾斜の一面をみることができる。彼が、“……we are able to select from the context—

from the background—those elements which seem relevant to the meaning—complex on which we are focusing.”³⁵⁾と述べているのは、言語行動における濾過作用を重視しているからに他ならない。我々の周辺に展開される多様な言語事実から適宜必要に応じて取捨選択できる能力が我々にそなわっていると考えているのであり、この能力は文を越えたマクロ構造から核語に至る各階層構造全てに係わる一般的な能力であると思われる。それは、Allenが引用している Hebb 等の“man’s enormous capacity for latent learning”に他ならず、“latent learning without reinforcement is one of the facts of human behavior, normal consequence of perception”という仮説³⁶⁾に結びつくものである。Allenの英語教育に対する主張の中で行われている従来の文型主導の機械的練習への批判は、このことと大いに関係があることは否定できない。

9) 扇形分析の最も大きな前提、即ち構造を伴う体系としての言語は、それ自体の中にさまざまな下位体系を内包しているとする立場は、英語の具体的分析において、より大きな構造に重複構造として組み込まれている構造及び語の階層という図式となって扇形に表われてくることを既に述べた。このように、文構造を顕在的なものも潜在的なものも含めて、固有の構造形を見出そうとする努力は、構造言語学以後の言語分析において、非常に特色ある主張であることは間違いない。しかし基本にかかわる問題点が幾つかあることも見逃し得ない。これらを結論としてまとめてみたい。

第一に定義に関してである。主語の定義即ち“The subject is defined as the unit around which an X-word shifts in Yes-No question.”³⁷⁾や副詞の定義即ち“Adverbs are defined as lexemes ending in -ly that occur in front, middle, H, or end positions, but not directly preceding nouns in noun cluster.”³⁸⁾あるいは文を Sn=cap+U+pun. (Sentence (Sn) consists of (obligatory) capitalization plus an (obligatory) sentence-unit plus (obligatory) end punctuation.”³⁹⁾としている定義にみられるように、機能的手順の厳密性がある一方、“a sentence is a linguistic unit comprising two components, one of which (the subject) names some entity about which the other component (the predicate) says something or denies something, or asks a question.”⁴⁰⁾の如く、観念的意味依存の基準がみられることである。このことは構造形設定や品詞分類にも見られるもので、扇形分析が結局構造的手法をとりながら、ある一面で伝統的文法範疇を大巾にとり入れている混合体を呈しており、学界から冷やかな眼でみられている原因の一つになっていると思われる。

第二に潜在性 (potentiality) をめぐる問題である。この潜在性は predicatid, clausid などの構造形のみならず、位置の連鎖からなる文も充されない位置があるとする「空」の考え方にも表われているが、一方ではD扇形核 (D=droppable) のように削除可能性という規準で設定されたものもある。これは、充され得る可能性をもつという意味において使われている潜在性と相矛盾するものであって、その境界線が明確にならない限り、扇形核設定に混乱をまねくものと言わなければならない。

第三に類似性 (parallelism) についての考え方である。2個以上の同じ語を含む同形構造を類似形と呼んでいるが、それが純粋な統語関係によっては示されないある種の違った関係を内包する時、階層の相違という処理しか対応できず、Allenの“I know of no way of determining of the first cut in a noun cluster like three blind mice with any real assurance that I am not being arbitrary.”⁴¹⁾という IC へのきびしい批判にもかかわらず、扇形核の連鎖としての結果は、同じ表層に同じ構造形が描出される危険性があることを否定し難い。

第四に転位性をめぐる問題がある。扇形分析においては、基本的に機能孔と充当詞の方式に転位

性という特性を付加したことが特徴の一つと考えられ、典型的なものとしてPP扇形核があげられる。PP(postponed)核は、主語位置に起るもので、転倒文のように本来の位置に充当されていない主語として区別されているのであるが、 $LYFI\tilde{X}S\tilde{M}\tilde{X}MV\tilde{C}\tilde{B}OBC_1C_2C_3D_1D_2PPE_1E_2E_3PPZ$ に示される扇形核のうち、 \tilde{X} 、 \tilde{M} 、 \tilde{C} 、 \tilde{B} は転位したものととして扱われ、SについてはPP核としている理由が明確でない。これは当然 \tilde{S} として処理可能なものである。

第五に文型についてである。各自然語について、そのタイプ分類の主要な基準の一つとして、その言語における文中の各要素の標準的配列、即ち語順をあげることができることは既に述べた。この場合、語順を説明するために主に行われてきたのは、文法上の機能を中心にした考え方である。これらの要素をS-Vにわけ、更に細分割する結果として表われる語順型は、いわば固定的位置の確認に他ならない。扇形分析も同様機能的な位置、即ち扇形核によって語順解明を大きな目標としており、その点において、この分析は有意義である。ただその結果は、扇形核の連鎖として示されているだけで、類型即ち文型が明示されていない。更に又、人為的、修辭的技巧が洗練の度を加えている現代英語において、転位あるいは空位置(unfilled position)によって対応しようとする扇形分析は、個々の構造形の抽出において顕著な成果をあげながら、文型分類が確立していないために、当初の狙いの一つであった文体という、文を越えたマクロ構造にも何ら具体的提言をしていないという事実をあげておきたい。

以上、扇形分析の主要な問題をめぐって、私見を若干述べてきた。筆者は、これによって「遺漏なき文法はあり得ない」ことを確認するために、特に議論を試みた積りはない。ただ、この分析との出会いから十余年を経た今日、扇形分析がこれらの批判を越えた厳密な理論性を再構築し、それを規定する客観的規準を設定して、より精緻な分析を示してくれることを心から望むものである。

註

- 1) 金谷, 「言語分析の応用性—Sector Analysisの場合」函館英文学, IX, (函館英語英文学会, 1970), および金谷, 「扇形分析再考」北海道教育大学紀要(第一部A), 第24巻, 第2号, (1974), その他。
- 2) R. L. Allen, "Prolegomena to a Neo-structuralist Theory of Language," *Word*, Vol. 29, (Dec. 1978).
- 3) *Ibid.* p. 252.
- 4) Block & Trager, *Outline of Linguistic Analysis*, (Baltimore: Linguistic Society of America, 1942), p. 53.
- 5) W. Haas, "Linguistic Structures," *Word*, Vol. 16, (August, 1960), pp. 263–269.
- 6) Allen, *English Grammars and English Grammar*, (New York: Charles Scribner's Sons, 1972), p. 198.
- 7) R. L. Longacre, *Grammar Discovery Procedures*, (The Hague: Mouton & Co. 1964), p. 16.
- 8) E. Nida, *A Synopsis of English Syntax*, (The Hague: Mouton & Co. 1966), p. 54.
- 9) Allen, *Linguistic and Written Composition*, (The English Language in the School Program, 1966), p. 228.
- 10) Allen, "Better Reading Through the Recognition of Grammatical Relation," *The Reading Teacher* XVIII, (Dec. 1964), p. 21.
- 11) Allen, *The Verb System of Present-Day American English*, (The Hague: Mouton & Co. 1966), p. 99.
- 12) SENT_nは、その文がある paragraph において、n 番目の文であることを示す。
- 13) +は、その構造が拡大単位(augmented unit)であることを示す。
- 14) この場合、 ϕ によって空であることが示されている。
- 15) Allen, *English Grammars*, (1972), p. 207.
- 16) *Ibid.* p. 165.
- 17) *Ibid.* p. 177.

- 18) *Ibid.* p. 167.
- 19) D. T. Binh, *A Tagmemic Comparison of the Structure of English and Vietnamese Sentences*, (The Hague : Mouton, 1971). p. 55 参照.
- 20) Allen, *English Grammars*, (1972), p. 197.
- 21) *Ibid.* p. 196.
- 22) Allen, *The Verb System*, (1966). p. 88.
- 23) Halliday & Hasan, *Cohesion in English*, (London : Logman, 1976), p. 143.
- 24) Allen, *English Grammars*. (1972), p. 183.
- 25) Allen, *On Linguistic Metafunctions*, (New York : International Linguistic Association, 1971), p. 16.
- 26) R. Lees, "Transformation Grammars and the Fries Framework," *Reading in Applied English Linguistics*, ed. H. Allen (New York : Appleton-Century-Crofts, 1964), p. 137.
- 27) ケネス L. ジャクソン, 「日英語の対照研究 英語中間副詞と日本語相当詞」, 田中春美訳 (大修館, 1970).
- 28) *Ibid.* p. 27.
- 29) Allen, *English Grammars*, (1972), p. 158.
- 30) Allen, "Prolegomena", (1978), p. 242.
- 31) *Ibid.*
- 32) *Ibid.* p. 248.
- 33) *Ibid.*
- 34) Allen, *English Grammars*, (1972), p. 159.
- 35) Allen, "Prolegomena", (1978), p. 255.
- 36) *Ibid.* p. 241.
- 37) Allen, *English Grammars* (1972), p. 177.
- 38) Allen, *The Verb System* (1966), p. 101.
- 39) Allen, *English Grammars*, (1972), p. 172.
- 40) *Ibid.* p. 168.
- 41) Allen, "Sector Analysis : From Sentence to Morpheme in English." *Monograph Series on Language and Linguistics*, No. 20, (Washington, D. C. Georgetown U. P. 1967), p. 160.

(本学助教授・函館分校)